

---

# 麻雀部！！

GRAM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻雀部！！

### 【Nコード】

N7322C

### 【作者名】

GRAM

### 【あらすじ】

普通の高校にしては珍しく存在する部活、『麻雀部』。主人公を含め、部員たちの行く先には何が待っているのだろうか？結構本格的な麻雀小説（自称）です。

## 第00局 確認

「こんちわー！二年の足立でっす！」

「こんにちは。部長の森です。」

「いやぁ部長。誰がこんな麻雀の部活の話なんか読むんでしょうね！？女のあたしにや全然理解できませんって。」

「どうにもこうにも、作者の趣味みたいね。ていうか足立さん、私も女なんだけど……一応部長なんだけど……」

「あはは、そんな深い意味はありませんてば。ところで部長。ここでは一体何をどうするんですかね？」

「えーとカンペによると……どうやら部活中のルール説明ですね。その他にも諸々。」

「というわけでまずルール説明です！」

- ・半荘戦。東南回し。
- ・点棒は25000点持ち30000点返し。
- ・花牌、赤5は使用せず。
- ・喰い下がりタンヤオ（喰いタン）あり、後ヅケあり。
- ・裏ドラ、カンドラ、カン裏、一発あり。
- ・二家和、三家和は全て頭ハネ。
- ・ノーテン罰符は場三千点。形式テンパイあり。
- ・本場は一本につき300点。
- ・ラス親の和了終了有り。
- ・ウマあり（1位+30000点、2位+10000点、3位-10000点、4位-30000点）。オカあり。
- ・順位は上家優先なし。同得点の場合は同順位
- ・途中流局あり（九種九牌、四風連打、4人リーチ等）

- ・フリテンはツモ以外で和了できない。
- ・フリテンリーチあり。但しツモアガリのみ。
- ・嶺上開花によるアガリは全てツモアガリ。
- ・役満は純粋な複合に限り、ダブル、トリプル等認める（例：大三元四暗刻、字一色小四喜、等）。

「はい！面倒臭くてやってられません！」

「専門用語は皆さんで調べてください。主に最強戦のルールを使っています。さて、次に表記でしょうか。」

「表記？何をですか？」

「残念ながら、ネット小説では麻雀放 記みたいに牌姿を表現できないのよ。」

「あー、あの牌を小さくしたみたいなやつですか」

「作者なりに色々工夫したつもりみたいですが、かえって分かりにくいと言えませんか。」

「本当は の数字とか使いたんだけど、機種依存文字で使えないからね。あ、ローマ数字も半角ローマ字で代用してるんだって？」

「表記は以下の通りです」

萬子<sup>マンズ</sup>：一二三四……九

筒子<sup>ヒンズ</sup>：1 2 3 4 …… 9

索子<sup>ソーズ</sup>：I II III IV …… IX

字牌：東南西北發中

・例その1・

家手牌：二三四2VI VI VI・3

鳴き：白（白）白・（5）46

右端の牌がツモ牌。 には東南西北のいずれかが入る。

鳴き牌は手牌表記の下に表示。（白）は他家から鳴いた、という意味。この場合は対面から白を鳴いた、上家から5をチーした、ということになる。

鳴き牌は左から右へ増えていく。

和了手牌も同様に表示する。

・例その2・

家河：北 II 九1（「東」）北3（白）8

左から右へ捨て牌は増えていく。 には東南西北のいずれかが入る。

リーチ宣言牌を「」で表記。鳴かれた牌を（）で表記。

重複する場合、つまりリーチ宣言牌が他家に鳴かれた場合も上記の通りで表記。

・例その3・

南 局 本場ドラ：四

ドラ：6白 II 南

上記は、ドラ表示牌を示すのではなく、ドラそのものを示す。つまり四萬がドラ。しかし実際のドラ表示牌は三萬なので、ドラは場

に4枚ある。

裏ドラ、カンドラ、カン裏も同様に表記する。

和了した際のドラ表示は上記の通り。この場合は、6が表ドラ、白がカンドラ、エが裏ドラ、南がカン裏となる。

「以上です」

「ややこしい」

「まあ、後は適当に流しちゃいましょう。足りないのは本編で補完でことで」

「責任丸投げじゃないっすか！」

「では本編で」

## 第00局 確認（後書き）

「登場人物紹介とかあるじゃないですか!？」

「後からでも出来ます。」

「非道っ」

## 第01局 日常（前書き）

アカギと哲也と雀鬼と哭きの竜と天牌と兎と咲とむこうぶちと朱雀とムダツモ無き改革などの漫画と、麻雀格闘倶楽部とMJとハンゲなどのゲームが好きな作者の小説です。



## 第01局 日常

タン…

タン…

タン…

タン…

タン…

伽藍と静まり返った室内。柔らかな夕暮れの陽光が、仄かに床を朱色へと染めていく。

その中を、淡々とした打牌音が幾たびも響いていた。

「ツモ。1300オール……4本付け。連荘……」

ふと止まる打牌。告げられる親番続行の声。

しばし点棒のやり取りの後、卓上は再び動き出した。

南4局5本場 ドラ：四

ラス親の連荘が続き、他家にとっては厳しい展開になっていた。元より3着だったラス親の5連荘だ。既に2着、それもトップとの差はあと3000点もない。

「……リーチ」

配牌されて5巡後、誰の鳴きも入らず、親の先制リーチが入る。もうこの時点で親のツモに勢いがきけることを、卓にいる全員が感じていた。他家の配牌はいずれもバラバラ。たとえテンパイ出来たとしても、ツモには親のほうがあるだろう。

より一層濃くなっていく敗色の空気。

南家の自摸番、山へ手を伸ばした時、変化が起きた。

「ポン」

南家の手が止まる。突如発声したのは、現在トップである西家だ。このときの西家の手牌、

西家手牌：二三四246    II   VII   VII   IX

鳴き：VIIII    (VIIII)    VIIII

イーシャンテンではあるが、役無し。むしろ一盃口をわざわざ崩してのタンヤオ受け。しかし、この鳴きはただ闇雲に鳴いたわけではない。

続いて捨牌だが、親の河は、

東家河：北    II    1九（「VIIII」）

「さて、ここから勝負ですか……」

数度深呼吸をすると、打・IX。    通した。

この巡目は親は和了れず、河に北が追加される。安全牌は増えていないまま西家のツモ。

（VIIII …… 危ないところだ…一発だったかも）

河読みの初步の初步、裏スジである。例えばカンチャン待ちの68から5を引き入れ、両面待ちへ受け変え打・8、56によ4ー7待ち。このような一般的パターン、麻雀のメカニズムを読み取った危険牌の絞り方だ。

これを則って見てみると、逆に V I I I が河に捨ててある時点で V I I V I I の V I V I I I 待ち、I I I が捨ててある時点で I I I I I V の I I I V 待ち、それぞれの可能性が消え結果、V の安全度が上がる。

(でも、ここまでであからさまなのも怪しいけど……)

内心苦笑しながらも西家、打V。これも通す。

こうして、親のツモ和了もないまま数巡が過ぎた。

## 九巡目。

西家手牌：二三四2 I V V V I V I I V I I V I I .  
V I

鳴き：V I I I I (V I I I I) V I I I I

東家河：北 I I 九1(「V I I I I」)北3八東

西家にチャンスが巡ってきた。打2で、I I I I I V I 、V  
V I I I I の多面張。

だが、

(2、通るか?)

リーチ牌まで捨牌は全て手出し。裏スジのことを考えると2も危険牌の一つである。

しかし、これまでの数巡で4、8とも通し、ピンスに待ちはあるとは思えない。そうは思っても、2が未だ他家の河に姿を見せていないのも事実だ。つまり2が危険であることに変わりはない。

加えて2着目のリーチだ。たとえ流局まで放銃を凌いだとしても、ツモ和了られては意味がない。

2を通したとしても、すでに自分の河には数巡前にV が切られている。フリテンである以上、ロン和了ができない。こうなっては自分のツモのみしか頼れないのだ。

（ここは…）

緊張が、呼吸を乱していく。

指先が汗ばみ、牌の触覚がじつとりと濡れていく。

僅かな間を置いて、牌を切り出す。

タン…

タン…

タン…

「ツモ」

「！」

静かに、牌を倒す音が聞こえた。

その牌には、ピンズの模様が、二つ。

「リーツモ、裏、ナシ……1000オールの5本」

東家手牌：一二三22 I V I V I V V I V I I V

IIII IX・2

ドラ：四・白

「マクリ、ですね？」

「……はい。部長」

西家にいた男子生徒はその場で立ち上がり、頭を下げた。その先にいる部長、と呼ばれた女子生徒は静かに首を振り、微笑んだ。

「たまたま、たまたまよ。白井くん。あなたも張っていたんでしょ？」

「ええ、まあ。」

西家手牌：二三四2 IV V VI VII VII VII

鳴き：VIIII (VIIII) VIIII

結局、白井は VI のチャンスを棒に振った。

「あらあら、当たり牌全部止められちゃったのね。」

「でも、部長には敵いませんでした。」

「それは唯の結果論だわ。白井くんはVI を引き入れての多面張を捨てて、2を止めてる。」

「ただ安牌っぽいのを打っただけですよ。それこそ結果論です。」

白井が微笑み返す。すると、南家に座っていた生徒が立ち上がった。顔は、ニヤニヤと何やら面白いものを見たような顔である。

「なーに二人の世界に入っちゃってるんですか？」

白井と同年の女子生徒、二年生の足立だった。

そう言われた二人は、恥ずかしそうに顔を互いに背ける。そんな様子の二人を見た足立は、さらに顔がニヤけていった。

その間に入るように、

「……とりあえず、もう一半荘、やるぞ」

そう言って北家に座っていた生徒が、卓の中央、開口ボタンを押した。

それに合わせて中央の部分が下へ抜け、河にあった牌を全て飲み込んでいく。足立も、手牌をその中へザラザラと流し込んだ。

他の部員も、それに合わせて手牌を流し込む。

「さー、もっかい！場決め場決め」

「ごめんなさい。私はこれで失礼します。」

次の山がせり上がってくる途中、部長は立ち上がった。

「森、いつもより早いんじゃないか？」

北家だった大和田が話しかける。森、彼女の名前だろうか、彼女は艶やかな長髪をなびかせ、自分の鞆を手にとった。

大和田は三年生で、ここの副部長にあたる存在だ。

「帰って勧誘チラシ作らないと。」

「あーそういえば、来週からでしたっけ。部勧誘。」

「今年は何人が入るんでしょうね」

「………とりあえず、今日はこれで終わりだな。」

夕暮れが、部屋を真っ赤へと照らす。

西日の傾く廊下の一角。部室のドアには一つの張り紙がされていた。

【麻雀部へようこそ お一人様でも大歓迎】

「……さすがにこのチラシも問題ね……ここは雀荘じゃないし」

森は溜息をつきながらその張り紙を剥がした。

ドアの上方、クラス分けの表札が掛けられている場所。そこには学年も、クラスも書かれていない。

### 【麻雀部】

「今年は何人入るのかしら……」

剥がした張り紙をクシャクシャと丸めながら、森はそんな呟きを漏らす。

相変わらず、西日の夕焼けが、廊下を赤く染め上げていた。

## 第02局 思案

入学式が終わって2週間が経過した。

まだ着慣れぬブレザーの制服を着た一年生、一条飛鳥は机の上で唸っていた。

「一条さん、さっきから何うなってるの？」

時刻はまだ昼休み。すでに弁当を食べ終わった生徒たちは、思い思いの暇を過ごしている。

そんな中、飛鳥の隣の席に座っていた女子生徒が声をかけた。

「仙道さん」

飛鳥が、机から目を離して、仙道を見る。しかし飛鳥は大して反応することなく、再び机を睨みつけた。そして、また唸りだす。

机の上に散らばる多くの紙を見て、仙道は、ああ、と一人頷いた。

「一条さん、部活とかで悩んでるわけ？」

「う、うん……どれにしようかなあ、て」

散らばる紙たちは、全部この高校の部勧誘のチラシであった。今週から始まった部活の勧誘期間。各部活のupper級生たちは、自分たちで看板を創ったり、チラシを配ったりと、一年生を一人でも多く獲得しようと余念が無い。

今朝も、校門には実に多くの先輩から、このようにチラシを渡されたのだった。

「一年から見れば、結構鬱陶しいのよね。朝のアレ。特に部活とか決まってる人にはさ」

「仙道さん、サッカー、だっけ？女子のなんてあったんだ…」

「いんや、確かにサッカーだけど女子サッカー部はなかった。結局、男子のマナージャーでこと入った。」

「いやー残念だ、期待外れだ、と仙道は残念そうに話すが、飛鳥にはそんな彼女がとも落ち込んでるようには見えない。

仙道は、飛鳥よりも10センチ以上も背が高く、見るからにスポ



「イツが得意そうな生徒だ。いや、実際に得意なのだろう。体育の授業では、飛鳥は並外れた身体能力を彼女に見せ付けられている。

ざつくばらん、という表現通りの性格を示唆するように、まるで侍のように前髪ごと一緒に後ろに結っている。

かわいい、というより、かつこいい、という言葉が似合っていると、飛鳥は素直にそう思った。

二人は席が隣同士ということもあり、始業してから何かと話す仲であつた。

「一条さんも、何かスポーツやるの？」

「う、うーん…私は文化系かな。ホラ、私ってどんくさいし…」

「確かにそうかも。体育ん時とか」

あははは、と飛鳥は苦い表情で笑う。そんな彼女の両膝には、スカート裾に見え隠れして、大きな絆創膏が貼つてあつた。

「あんな派手な転び方した人、初めて見たよ。」

その時の情景を思い出してか、仙道はニヤニヤと笑い出した。

体育の時に見せられた仙道の身体能力で奮起した飛鳥は、思いのほか頑張ってしまったのだ。そして、ものの見事に転倒、こうして怪我をした。

「で、実際はどんなのが良いんだい？」

「んーと……」

飛鳥はいくつかのチラシを選びだす。とりあえず候補として考えてるものだろうか。

「料理研究部とか、絵画部とか、文芸部とか、ゲーム同好会とか…

…」

「思いのほかジャンルに富んでるね……。あと、ゲーム同好会は実際、オタクしかいないって聞いたけど」

「やっぱり？…ん、どうしようかな……」

ガサガサと机の上を色白な手が這う。

ふと、一枚のチラシに触れた。

「まーじゃん…?」

「何だつて?」

「これ…」

それは一枚のコピー用紙。女子が書いたのだろうか、可愛いイラストに加えて、これまた可愛い丸っこい字体で部活名が書かれていた。

「麻雀部?」

チラシを覗き込んだ仙道も、疑問符が浮かび上がる。

「マージャン、なんて種目あったかな?聞いたことないや。」

「いや一条さん、体育会系の部活とは到底……。っていうか、これはやっぱり、」

「やっぱり、あの麻雀だよ。ゲームの。」

「いや、もしかしたら裏に囲碁将棋部って書いてあるかも……。ジョーク?みたいな感じで」

仙道にそう言われ、飛鳥はそのチラシを裏返してみた。が、裏には何も書かれていない。むしろ、囲碁将棋部のチラシは先ほど飛鳥が選り出したチラシたちの中に入っている。

なおさら疑問符が二人の頭に浮かんだ。

「本当に麻雀“だけ”やる部、なのかな?」

「いや、そもそもこういうのって同好会じゃない?」

「ほぼ毎日部活やってるみたい……。これ本当に部活なのかな?」

チラシの活動時間の項目には、月火水木金と書かれている。文化系の部活の割には意外とアグレッシブな内容である。普通文化系なら月水金なり週2、3程度程度の部活のはずだ。

あれやこれや二人は話し合うが、どれも語尾に「?」と疑問形を交えている。一向に話がまとまらない。

「行ってみようかな」

キンコーンカーンコーン…

やがて昼休みを終わりを告げる予鈴が鳴り響く。  
その音に紛れて、飛鳥からそんな言葉が漏れたのを、仙道は聞いた。

### 第03局 接近

放課後。飛鳥は旧校舎の廊下を歩いていった。

文化系の部室は、まとめられて一つの校舎に収まっている。それは、全学年の教室がある校舎とは別館、いかにも歴史を感じさせる風格の旧校舎であった。どれくら古いかというと、

（うわ、大丈夫かなこの床…）

ギシギシと一歩進めるたびに、廊下の床板は音をたてるほどである。

ふと足を止め、窓を見ると、運動場が一望できた。トラックを延々と走り続ける陸上部、少し離れた場所では野球部が練習をしている。そして、

「あ、仙道さんだ」

飛鳥が声を上げる。

広いトラックの中心に張り巡らされた白線。その内側ではサッカー部が練習に励んでいる。

その多くの部員の中、ユニフォームを着た生徒を適当に仙道と見立てて手を振る。生徒は飛鳥の気配に気づいたのか、旧校舎の方へと振り返った。そして、手を振る飛鳥を見て首を傾げてる。

「あ、違った？」飛鳥は慌てて手を引つ込めた。

「何やってるの？」

え、と飛鳥は振り返る。背後には、仙道が立っていた。ユニフォームは着ていない。

「仙道さん？あれ？今グラウンドに？あれ？」

「何を見てたか分からないけど、私はさっきからここに居たよ」

「あ、うん…じゃあ見間違えかあ…」

もう一度運動場を見ると、先ほどの生徒はすでに練習に入っていて、見失っていた。

「仙道さん練習は？」

「今日は休むことにする」

「え、何で？」

「友達が一人で正体の分からん部に行こうとしてるんだ。さすがに心配だつて」

廊下を歩きながら、仙道が飛鳥の肩を叩く。

「別に大丈夫だよ。ただ麻雀する部だよ？……多分」

「いやいや……そうであっても、男子しか居なかったり、不良の集まりかもしれないぞ？カツアゲとかされるかも」

ハッ、として飛鳥は立ち止まる。何か思い当たったのか、それとも重大な可能性を考えていなかった自分に気づいたのか。

思わず飛鳥は弁明してみた。

「でもあのチラシ、」

「チラシなんて、案外どうにでもなるもんだよ？」

「う……やっぱり止めようかな……」

「…一条さんてよく“天然”って言われない？」

うーん、と飛鳥は唸った。考えてるのか惚けてるのか、視線は中空を泳いでいる。

やがて、

「分かんない」

と、コロコロと笑いながら言った。

そんな彼女の言葉に仙道は内心、やっぱり天然だ、と溜息をついた。

「で、結局どうするわけ？」

「うーん……」

会話に盛り上がっているうちに、目的の部室まで来てしまった。

これまでの仙道の話聞いてるうちに、飛鳥の心はすっかり折れてしまった。

ここまで来といて帰るのも忍びないが、あと一押し、あと一押し何かがあれば帰る決心と、麻雀部を諦める決意ができる気がする。

飛鳥はそんな胸中で立ち止まっていた。

目の前には、教室と同じ引き戸。部室の廊下側には窓はなく、加えてドアにも窓はない。廊下からでは一切中の様子が伺えない。

「入らないの？」

「え、えつと……」

ドアを覗むだけで一向に入ろうとしない飛鳥に、とうとう嫌気が差した仙道が声をかけた。

相変わらず、飛鳥はドアを見つめて悩んでいる。

「入らないの？」

「もうちよつと待って……え？」

驚いて思わず振り返る。

聞こえてきたのは、明らかに仙道のとは違う声だったのだ。セリフは同じだったが。

仙道の隣には、いつの間にか女子生徒が一人、立っていた。

校則で、ブレザーには学年を色で表すピンバッチを付けられる。

彼女の胸には、三年生を表す青い模様のピンバッチがあった。

「いきなりごめんなさい。あなた達、この部に用があると思ったんだけど……違ったかしら？」

「い、いえ！ 違うないというか、違うというか……」

突然先輩に声をかけられて焦る飛鳥。

そんな彼女の心境を察したのか、その女子生徒はにこりと微笑むと、自ら部室のドアを開いた。

ザア、と。

どこかの窓が開いてるのか、ドアを開けた途端に風が彼女たちに吹き付けた。

「心配要らないわ。一麻雀部 ウチ は見学自由よ」

春一番の風に艶やかな長髪を一靡　なび　かせて、再び女子生徒は微笑んだ。

すっと、散々悩ませていた胸のつかえが軽くなる。微笑む先輩を見て、飛鳥に恐怖心は無くなっていた。

後ろを振り返ると、仙道が静かに頷いていた。しかしその顔は、女子サッカー部がなかったことを話したときのような表情であった。良い方向であろうと、アテが外れると彼女はそんな表情をするらしい。

一歩、歩みを進める。

「麻雀部へようこそ。私は三年の、森　一　翠　みどり。よろしくね。」

## 第04局 説明

「見学しにきたみたい」

森は、適当にしてて、と飛鳥たちに言った後、他の部員たちにそう説明した。

「あ」「お」

思わず二人の口から驚きが漏れる。

部室に入って真っ先に目についたのは、部屋の中心に置かれた全自動卓だった。

ただ今は誰も使っていないのか、卓を大きなシートが覆っていた。そのシートが、時折吹く風で、チラチラと裾を揺らしている。

既に部室に集まっていた部員は2人ほど。部員達は、飛鳥と仙道を見て、どうしたもんやらと固まっている。

そして二人も、この後どうしたらいいのかわからず、壁際で直立のまま動けずにいた。

「見学者ですか。では、二人とも鞆をこちらに置いてください。」

あと、座る場所を用意します。」

先に部室に居た生徒の一人、綺麗に切りそろえられたおかつぱ髪の女子生徒が、二人を促す。ピンバッチを見ると、二年生を表す黄色の模様であった。

部室は、やはり旧校舎らしく、壁や天井がかなり痛んでる様子である。だが、それ以外はまるで別である。

きちんと手入れされた自動卓の他にも、隅には使われない机や椅子がぎっつちりと積まれていたり、床がちゃんと掃除されていたり、飛



鳥たちが想像していたよりもとても良い過ごしやすそうな環境であった。加えて、当初の心配のタネだった男子しかいない、というのも、話かけられた先輩が女子である時点で解決している。

「どうかしましたか？」

「あ、すいません……」

ふむ、と女子生徒のメガネが持ち上がる。

仙道は部室の思いがけないほどの好印象に、部室をそこら中見回していた。それを不審に思ったのか、二年の生徒は仙道に訝しげな目を送る。メガネの向こうにある、その鋭い視線に、思わず仙道は謝っていた。

メガネといい、言動といい、何やら彼女からは“お堅い”雰囲気漂わせている。

多分、何事もきっちりしないと気が済まない性格なんだろうな、と持ってきた椅子を“きっちり”並べている先輩を見て、飛鳥はそう思った。

「部長、私が説明しますか？」

「ん。よろしくお願いね、宮内さん」

森がそう言って手を振る。

（あの人部長だったんだ……）

飛鳥はその事実には驚いたが、あの人は部長が一番似合うかも、と何となく思った。

宮内と呼ばれた女子生徒は再び、くい、とメガネを持ち上げた。

「私は、この部の会計をやってます、一宮内 みやうち です。」

この部の簡単な説明を始めるので、楽にして聞いて下さい。あと、質問はいつでも構いません。」

飛鳥と仙道の座った目線からでは、立っている宮内のメガネが反射してその表情が良く見えない。

楽にしているとは言われても、自分たちは座らされて相手は立っているというこの圧迫ポジションである。まるで先生にでも叱られる気がして、二人は一向に落ち着けなかった。

「は、はいっ」

背筋をピンと伸ばしたまま、飛鳥が返事する。初対面の緊張も合  
わさってか、声が少々上ずっていたが。

「良い返事です。」

まずこの部ですが、名前を見ての通り、麻雀をすることを目的に  
おいた部活です。マージャンというゲームは知っていますね？」

「ええ、まあ……」

同じく背筋を伸ばして座っている仙道が返した。時折、居心地の  
悪そうに体勢を変えていた。

飛鳥も頷く。

「結構です。」

麻雀部は、ゲームの最終目標である“勝つ”ための技術の向上、  
ひいては参加する者の精神を鍛えることを念頭に置いています。麻  
雀を愛好する人やこれから始める人でも気軽に入部してください。  
以上、校報『部活動紹介』より。

何か質問はありますか？」

「……」

「……」

「無いようですね。」

部長、終わりました。」

「ありがと……やっぱり私がやるわ」

森は少々困ったように微笑みながら、二人の前にやってきた。そ  
んな森を見て、よく笑う人だな、と仙道は内心想った。その微笑み  
は、不快という意味ではなく、むしろ見るものを和ませてくれる力  
があった。

再び、メガネが持ち上がる。

「何か説明不足でしたか？」

「いえ、あなたの言いたいことは大体伝わってると思うわ。ただ、  
本当に必要な分しか伝わっていないけど。さて……」

そう宮内を嗜めると、森は二人に向き直った。

「何事も“ああ”なのが宮内さんの長所でもあるから、気にしないでね。あと、そんな堅くならなくて良いわよ？もつとりラックスして」

ほっ、と安堵の息を漏らす飛鳥。とりあえず肩の力を抜いて楽な、いつも通りの姿勢で座り直した。

ただ、相変わらず森の後ろでは宮内のメガネが光っている。太陽光の反射によつて、その表情は計り知れないおかげで、飛鳥は緊張を解けずにいた。

「部の内容は宮内さんが説明してくれた通りよ。言い方は違うけど、皆で打って実力を付けよう、てのが一麻雀部。ここ。の目標。勿論ノーレートだし、お金を賭けることは一切させてないわ。その辺は学校からも厳しく言われてるから安心して頂戴。」

ちなみに、部員は全部で5、6人てとこ。見ての通り、参加は自由だから人によつては来る日來ない日が分かれるわね。あと、部の掛け持ちはOKだから、別の部活と併用してる人も居るわ。

…こんなところかしら。何か知りたいこと、ある？」

あるもなにも、と飛鳥は首を横に振った。知りたいことは全て森が話してしまったのだ。それは、仙道も同様であつた。

そこへ、新たな闖入者が。

「呼ばれて飛び出て何たらー！」

バーン！と突如、部室の扉が開け放たれた。引き戸が全開にされ、扉と壁がぶつかり凄まじい打撃音が部屋に木霊する。

「やったー！まだ始まってなかったー！ いやー、参りましたよ。こないだの実力テストが悪くて担任に呼び出されちゃって」

さー、場決め場決め」

適当に鞆を放りながら、ドカドカと入ってきた女子生徒。登場もさることながら、その一挙一動が喧しくて仕方ない。

入ってきた女子生徒は、そのまま自動卓の椅子に座ってしまった。

「足立さん！」

足立が放り投げた鞆を拾いながら、宮内は激昂した。

「何度も言ってるでしょう！鞆や荷物は一箇所にとめる！」

「えー」

「えー、じゃない！」

そのベリーショートの髪が似合う女子生徒は、面倒そうに唇を尖らせるが、宮内の斬れるような鋭い視線に射抜かれ、渋々彼女から鞆を受け取った。

「ん？」

鞆を置きに行く途中、足立の視線が、飛鳥と仙道に目が合わさる。

「この人ら誰！？」

「本当に、あなたは勢いだけで生きてるんですね……この人たちは一年で、見学者です。」

まるで未知生命体でも見つけたかのような奇妙な表情をする足立。部室に入ったときに気づきそうなのだが、彼女は本当に気づいてなかったらしい。

「うお一年！？じゃあ早速囲もうぜ」

「は、はあ……」

足立の強烈なノリとキャラに圧倒され、仙道はやや仰け反り気味に答える。そんな足立の後ろでは、困ったように微笑む森と、呆れて溜息をついてる宮内が目に入った。

「足立さん、彼女たちは見学者であって、まだ入部を決めてないんですよ？」

「まあまあ宮内さん。」

そんなわけだから。お二人さん、どう？打ってかない？」

一度、飛鳥と仙道は顔を見合わせた。そして、仙道だけが頭を下げる。

「いや、遠慮しときます。私はただの付き添いなんで。」

飛鳥が驚いて再び仙道を見た。仙道は、その視線をあえて受け止めて、肩をすくめた。

じゃあ自分も、と言いかけたところで、飛鳥の手を足立が掴んでいた。

「ささ、おじさんがええとこ連れてってあげよう」

「え、あ、ちょ……」

冗談混じりに足立が飛鳥を卓に着かせる。不安げな表情のまま、飛鳥はもう一度仙道の方へ目をやった。

諦める。

仙道はそうつ目線を込めて首を振った。

## 第04局 説明（後書き）

ようやく対局が始まります。

## 第05局 素人

こうして、半ば強引ではあるが、飛鳥の対局が始まった。

「ま、親は二度振りでもして決めましょ」

飛鳥の対面に座った足立が自動卓を覆うシートをめくる。やや旧式ではあるが、雀荘などで使われる一般的な自動卓であった。

彼女たちにならうように、飛鳥の下家に森、上家に宮内がそれぞれ座る。

足立は全員が席に着いたのを確認すると、卓の中心部にある、『DICE』のボタンを押した。カラカラと音を立ててガラスの中のサイコロ二つが回る。

出た数は2と3。再び足立がボタンを押す。続いて出た合計は、8。

東家：森（起家）

南家：足立

西家：宮内

北家：飛鳥

東一局0本場 ドラ：西

「よろしくお願いします。」

「あ、よ、よろしく願いますっ……」

宮内が礼儀正しい姿勢で腰を30度曲げる。慌てて飛鳥も同く頭を下げた。

配牌を取りながら森が笑う。「そんなに堅くなくても良いの

よ  
」

北家手牌：二二五六八八4777東北白・北

「えつと…」

三巡目。

早くも飛鳥の手が止まった。だが実際に停まつてるように見えるのは、他の三人だけ。本人は普通に打っているのだが、他の三人に比べて、ツモから打牌までの時間が4、5秒遅いため、一人テンポが遅れているように見えるのだ。

やがて悩んだ後、打・東。

（初牌……なら、）

それを見た森は次巡、浮いていた北を切った。

「ポン」

ぎこちない動作で北が拾われる。

遅まきながらも、ゆっくりと確実に場は進んでいった。

「ポン」

「ポン」

「えつと…ツモ、です。」

手牌が倒された。

北家手牌：五777・五

鳴き：北北（北）・八八（八）・二二（二）



「トイトイ、ですよね？」

「あと北（役牌）もね」

森が1000点棒を二本渡しながら微笑む。1000・2000  
を和了<sup>あが</sup>り、飛鳥はプラス4000点。8巡目で和了りと、早い巡目  
で和了である。

東二局0本場 ドラ：4

「ツモ」

九巡目。

飛鳥は再び手牌を倒した。

西家手牌：一一88 V V V ・一

鳴き：IX IX (IX)・二二(二)

「トイトイ、です。」

「かあゝ！親マン張ってたのにゝ！」

足立が悔しそうに天を仰ぐ。足立の手牌にはドラの四筒が三枚見  
えた。

飛鳥はそんな彼女に畏縮し、それを森がなだめる。いつの間にか  
そんな図式が出来上がってた。

（なるほど……）

点棒を渡しながら、宮内はメガネの奥で目を細めた。

（やさしい先輩で良かったわね。一年生さん。）

飛鳥を一瞥して、今度は対面の森に目をやる。視線に気づいたの  
か、正面に座る女子生徒は、こちらに向かってニコリと微笑んだ。  
宮内は笑わず、クイ、とメガネを持ち上げてその視線を返した。

東三局0本場 ドラ：南

(さて……)

宮内は下家、飛鳥の手牌に目をやる。

南家鳴き：ⅠⅤ ⅠⅤ (ⅠⅤ)・九九(九)・ⅤⅠⅠⅠ ⅤⅠⅠⅠ  
Ⅰ (ⅤⅠⅠⅠ)

視線を戻し、自分の手牌に目を落とす。

これまでの飛鳥の和了 全て対々和だが、鳴きは全て森からのものだ。これ一体何を意味してるのだろうか。

(部長はおそらく、この半荘すべて一年のアシストに回る。それも、私と足立さんを完全に押さえつけて。 でも……)

東家手牌：六七七八九7789Ⅴ Ⅴ ⅤⅠ ⅤⅠⅠ・ⅤⅠⅠⅠⅠ

タンツ、と短い打牌の音が響きわたった。

「リーチ」

(これが私の打ち方です。 例え一年でも、負けるつもりはありません。)

打・7とともに出されたリーチ宣言。 山に手を伸ばしかけていた飛鳥の手が一瞬、止まる。

(ど、どうしよう……)

南家手牌：16南南・1

鳴き：ⅠⅤ ⅠⅤ (ⅠⅤ)・九九(九)・ⅤⅠⅠⅠ ⅤⅠⅠⅠ

(VIIII)

東家河：北東二一 二 IV 白 II 「7」

六筒のところで指が止まる。

(当たる、かな？でもこれを切らないと和了れないし……)

数秒ほど間を置いて、飛鳥は6を切った。それを見た宮内、足立が思わず目を丸くする。

宮内が小さい声で、通し、と言った。

(本当はこの人、素人なんじゃ？)

(うひゃー、一発目に油っこいとこ切るねー)

「チー」

二人が驚き、飛鳥がほっとしている間、森の手牌から45がさらされる。

森が牌を切る直前、宮内はハッとその森の鳴きを見た。

(部長、一年に差し込むつもりですか？となると……)

先ほどのチー、これで宮内のリーチの一発が消された。

もしこの後切り出される牌が自分の予想通りなら

(あくまで危険性を回避……相変わらず貴方の打ち方は理解できない。)

そして捨て牌、

タンッ

「……ロ、ロンッ」

森の手牌から切り出された南。そして手牌を倒す飛鳥。

ドラ：南

南家手牌：11南南・南

鳴き：IV IV (IV)・九九(九)・VIIII VIIII  
(VIIII)

「トイトイ、ドラ3……えっと、何点ですか？」

「跳満。12000。」

自らのリーチ棒を差し出しながら、宮内が機械のような単調さで、  
そう答えた。

「まるで茶番だな」

飛鳥たちとは離れた場所、椅子に座りながらその様子を見ていた  
仙道は、その声で振り返った。

そこには、自分たちが部室に來た時点で初めから居た部員、大和  
田が立っていた。今の今まで、紹介されることもなく、ただ机に座  
って事を眺めていたのだ。考えてみれば、ここの部員は見る限り、  
男子は彼一人だけだ。ひょっとしたら肩身が狭いのもかもしれない。  
そんなことを考えていると、隣の空いていた席、さっきまで飛鳥  
が座っていた椅子に、大和田は座った。一応こちらを気にしてか、  
彼は仙道と多少の距離をとった。

仙道の視線の先では、飛鳥たちが麻雀を続けている。

宮内や足立が何度もありチをかけるが、いずれも飛鳥の対々和で  
流れる。そんな対局が何度も繰り返されていた。確かにこれは茶番  
と言えるかもしれない。

「そう、かもしれないですね」

少々やる気の失せた声で仙道は答えた。

和了り続けているのは飛鳥だが、実際は森の掌の中。それが仙道にも容易く分かっていた。

しかしながら、彼女には気になることがあった。

結局、こうして麻雀部へ足を運ぶことになったのだが、その原因である飛鳥は、見る限り、まるで素人なのだ。たとえプロに通用するまででなくとも、それなりに『打てる』ものでなければ、実際に来ようとは思わないだろう。

見れば見るほど分からなくなっていく飛鳥の背中。一体彼女は何のためにここに来たのだろうか？

「しかし不思議だ。」

「？」

彼女たちを見ながら、大和田は無精髭の生える顎を撫でた。

「いくら全員でサポートしたところで、こつも毎局同じ手で和了れるわけじゃない。」

「……」

確かにそうかもしれない。他に役を知らない素人なら、ありえるかもしれないが。

気がつくと、仙道は飛鳥たちの卓へ歩み寄っていた。

「すいません。」

彼女の声に気づいて、森が振り返る。

「何かしら？」

「私にも次、打たせてもらえませんか？」

「勿論いいわよ」

そう微笑みながら森は立ち上がって、仙道を席へと促す。

大和田が語った『不思議』。

仙道は、そんな彼の言葉が一体どうやって起こっているのか、興味を持っていた。

第05局 素人（後書き）

ルビの振り方が今までずっと間違っていたことに気づいてしまった  
今日この頃。どうしょ。

ケータイ読者に優しくない小説。読みづれえ！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7322c/>

---

麻雀部！！

2010年10月9日21時11分発行